

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 15日現在

機関番号：32613

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21500980

研究課題名（和文）

ライフサイエンス創成期における日本の生命倫理思想の歴史的研究

研究課題名（英文）

Historical research on Japanese bioethical thought in the beginning of life sciences

研究代表者

林 真理 (HAYASHI MAKOTO)

工学院大学・基礎・教養教育部門・教授

研究者番号：70293082

研究成果の概要（和文）：

1970年代におけるライフサイエンス創成期の日本の生命倫理思想には、生命科学技術の発展に伴って生じつつあった、生命操作の可能性の増大に対する批判的な見解が存在していたが、それは「生命」と「科学技術」のあいだの両立不可能性という考え方を基礎にしていたことを明らかにした。そして、そういった生命の概念を特徴付けるものを、偶然性、固有性、有限性、関係性としてまとめることができること、この生命の概念は近年の生命倫理論争においても、重要な役割を果たしてきたことを示した。

研究成果の概要（英文）：

Japanese bioethical thought of the 1970s, the beginning of life sciences age, contained critical views against the increase of controllability of life which was appearing along the development of biosciences and biotechnology. This research shows that the views are based on the idea of contradiction between life and technology. With this idea, the concept of life is characterized as contingency, uniqueness, mortality and sociality. It also shows that this concept of life has been played an important role in the recent bioethical discussions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：科学技術論、生命論

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：生命倫理学

1. 研究開始当初の背景

生命科学技術研究に伴って社会的な問題が生じうるという見方、そういった問題の解決のために倫理的考察が必要であるという

見方、その考察は一つの学問領域を構成するという見方、まとめて言えば生命倫理あるいは生命倫理学というものがある、存在している、存在すべきであるという見方は、現在の日本において浸透しつつあるという

ことができるであろう。そのため、生命倫理についての歴史的な検討を行って、「なぜ」および「どのようにして」今のような生命倫理が立ち上がってきたのかを検討する試みが必要であるということもまた、考えられるようになってきた。その結果として、実際にそのような歴史的、社会学的研究が少しずつではあるが行われるようになってきており、本研究開始時においても、既に大きな成果が上げられているといえる状況にあった。

とりわけ、生命倫理について日本よりずっと以前から問題化、学問化に熱心であったアメリカ合衆国では、歴史的、社会学的研究が早くから非常に熱心に行われてきたと言える（歴史的な研究としてたとえば、Rothman(1991)が有名であり、社会学的な研究としてはFox, Renée C.; Swazey, Judith(1992)がよく知られた著作である）。そして、そういった著作が日本においてもよく知られるようになった結果として、日本の研究者コミュニティ（狭い意味での生命倫理学にとどまらず、それと関連する様々な領域の研究者集団）の内部においても、日本固有の歴史的、社会的状況が存在していることを前提にしながら、そういった歴史や社会状況のもとで起こった生命倫理問題や生命倫理のあり方について明らかにするための研究を進めようとする者が多数存在するようになってきた。

以下では煩瑣になるために個々の具体的な研究論文・著作に言及することはしないが、医療従事者の倫理（生命倫理というよりいわゆる医療倫理）の歴史を問題にする試み、アメリカ合衆国においても重要な問題とされた人体実験倫理の歴史を日本においても追究する試み（それはしばしば第二次世界大戦期における軍事研究の歴史研究とつながる）、さらには倫理学の応用学としての生命倫理学が倫理学研究者の中で立ち上がってきたことを振り返る試み、あるいは科学技術政策の流れの中でどのように生命倫理が位置づけられてきたかを探求する試みなどが行われてきた。また、そういった日本における社会状況をアメリカ合衆国など他国と比較して、日本における制度化、社会化の特徴を考察する試みも行われている。さらには、アジア諸国における生命倫理研究もまた比較対象となって、日本の生命倫理の特殊性や歴史的特徴も少しずつ明らかになってきていると言える。

こういった研究は、それぞれの立場は多様であり、また考え方に違いはあるものの、ほとんどすべて、今後の生命倫理および生命倫理学研究それ自体がどのような方向に向かうべきであるかという問題意識を内包したものであった。本研究代表者もまた、同様の問題意識をもっており、最初は科学技術社会

論（STS :Science, Technology and Society）的な観点から歴史的な考察を行った。その際には、科学技術とそれを受容する制度という枠組みを用いて、生命倫理が求められるようになってきた経緯に着目し、歴史的な考察を進めるための考え方を提唱し、それを具体的な3つの問題のケースにおいて示した。具体的には、審議会を通じて生命倫理に関する制度（法律、規則その他）が立ち上がってくる経過について、専門家、当事者、政府などの相互作用によって多様な経過や手続きがありうるという現状を比較考察するという研究を行った（林真理『操作される生命 科学的言説の政治学』NTT出版 2002年）。この研究は主に1980年代以降を対照とした生命倫理の政策決定にかかわる問題を扱ったものであったが、その後それに引き続いて、さらに時代を遡り、1970年代における論争を扱うことにした。

1980年代における脳死臓器移植論争を主要なきっかけにして、日本における生命倫理（学）が制度化されていったことについては多くの論者が述べているところである。しかし、それ以前の時代においても生命倫理に関わる問題は存在したはずであり、またそういった中で議論が様々に行われていた。そういった議論においては、1980年代における制度化の中で切り捨てられていったものが多数あるはずであると考え、そういった概念が何であるかを探る試みを次に行うことにした。その結果として、1970年代における生命倫理論争の中で、生命の大切さの根拠とされてきたいくつかの概念、生命の偶然性、固有性、有限性、関係性といった概念にたどり着くことになった。

2. 研究の目的

このようにして見いだされた、生命の偶然性、固有性、有限性、関係性といった概念について、それらがどういった文脈でどのように立ち上がってきたものであるか（あるいは以前からあったものであるが、あらたな技術の発展に伴って改めて確認されるようになったのか）を整理し、それらの概念の内実の多様性を理解すること、またその後の様々な生命倫理論争の中でそういった概念がどのような役割を果たしていったかということ明らかにすることを本研究の目的として設定した。

さらに、そのための下位目標として以下のようなことを考えた。

(1) 1970年代における生命倫理問題に関する様々な見解の表明、論争における言説などを取り上げ、それぞれの場面で上記の概念がどのように用いられているかということ考察すること。また、こういった生命を巡

る諸概念が、生命科学技術という営みとどのような関係を形成するののかについても明らかにすること。そのようにして、生命倫理の立脚点に対して、個人の選択の自由、科学技術における選択肢の増大がもたらす豊かさ、生命の質の向上といったこれまで強調されてきた概念以外の何ものかが存在していることを示すこと。

(2) 1980年代以降においても、生命の偶然性、固有性、有限性、関係性といった概念が、様々な論争においてどのように現れてくるか、あるいは現れてこないのか、それとも別の形をとるのかということをも明らかにし、考察すること。

(3) さらにこういった思想史的、概念的検討を行うにあたって、既にしばしば指摘されてきた類似概念との異同についての考察は欠かせないと考えてそれも行うことに決めた。具体的には、既に存在している「生命の尊厳」に関する議論、あるいは「人間の尊厳」という概念と、上記の4つの生命概念との関連、相違点を明らかにすること。

3. 研究の方法

1970年代以降の生命倫理論争の争点を探ることによって、生命の尊厳、大切さがどのように論じられてきたのか、言い換えれば生命倫理論争において、それぞれの立場の論者において前提となっている価値観はどのようなものかについて分析、考察を行うことにした。また、そういった価値観の対立構造をどのように克服あるいは調整していくかという倫理のあり方についての考察を行った。またそういった前提として、ミシェル・フーコーにおける「権力のテクノロジー」、ジョルジョ・アガンベンの「生政治」、ニコラス・ローズにおける biopolitics, biocapital といった概念を下敷きにしつつ、それらの論争において言われていること、言われていないこと、前提とされていること、前提とされていないこと、その他論争の置かれている文脈に関する考察を行った。

具体的には、次のような問題に関する考察を行った。非常に重要な初期の事例として受精卵研究に関する論争、受精卵の取り違え事件を巡る問題提起、代理出産を初めとする第三者のかかわる生殖補助技術に関わる論争、出生前診断技術の問題である。これらについて倫理的な次元の主張を分析し、それらの前提となっていることがらについて、科学論および生命論の観点から分析を行った。

他方で、生命倫理の前提とされてきた「人間の尊厳」の概念について、それが本研究によって導かれた生命の大切さを構成する概念とどのように重なりまた相違するかを見極めるために、「人間の尊厳」概念について、

これまでの歴史を探り、またその多様性をつかもうとして多少の文献研究を行った。特に取り上げたのは「尊厳概念の不毛性」に関する論争である。

4. 研究成果

生命の偶然性、固有性、有限性、関係性といった概念が他者性という概念を巡って関連していることを見だし、それらの関係性について考察を行うことができた。

受精卵研究の倫理が「人間」とそうでないものを区別すると同時に、生きているより生きていない方が倫理的であるという考え方を内包していることを示した。尊厳死、安楽死を巡る議論においても存在するこういった論理は、身体という他者から疎外された理念としての自己（人格としての自己）を尊重し、代わりに身体性を軽視するものである。それが生資本を支えている身体観、生命観となっていること、それに対して偶然性、固有性、有限性、関係性に基づく問題提起が対抗的に存在しうることを示した。

受精卵の取り違え事件、出生前診断の不確実性を巡る問題からは、生命科学技術が生命を制御し、その偶然性を消失させようとするものである一方、リスクという形での偶然性は残存し続け、そのような形で生命の他者性が見いだされるという事態が生じていること、生命科学技術が完全になりえないことにおいて、生命の大切さが維持されるという希望が残ることを見いだした。

第三者の関わる生殖技術の問題については、関係性の喪失が問題となっており、新たな関係性の構築という課題が存在している可能性を指摘することができた。

人間の尊厳という概念については、それが生命の尊厳と大きく異なる部分を持っており、包摂（生命という共通性へと様々なものを取り入れていこうとする態度）ではなく差異化（人間であるものとそうでないものの差異を重要視する態度）を含んでいるものであることを暫定的に結論付けた。そして、そういった結論に基づいて、生命倫理という概念を、人間の倫理ではなくより広い意味での生命の倫理へと開いていく方向性を明確にした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

韓星民・林真理、当事者を開発者と結び付ける科学技術コミュニケーターの可能性：円盤式点字ディスプレイ開発過程の分析、科学

技術社会論研究、査読有、10 巻、2013 年、
pp. 95-109

HAYASHI Makoto, “Associating Gene
Therapy with the Human Genome Project”,
*East Asian Science, Technology and
Society: An International Journal*, vol. 4,
no. 1, pp. 77-97. 査読有

林真理、細胞概念の展開 科学史研究にお
ける比較の事例として、国立民族学博物館
調査報告、査読無、no. 90, pp. 57-75.

〔学会発表〕(計2件)

林真理、「恵みとしての生命」論の可能性、
公共哲学研究会、2010年9月20日

林真理、サイエンスの外から見る「細胞」、
生命文化史セミナー(早稲田大学)、2009
年1月17日

〔図書〕(計4件)

林真理、感性工学と倫理、(椎塚久雄編、感
性工学ハンドブック、朝倉書店 所収)、2013
年出版予定

林真理、コミュニタリアニズムと生命観、(小
林正弥、菊地理夫編、コミュニタリアニズム
の世界、勁草書房 所収)、2013年出版予定

林真理、生殖技術の新展開、(吉岡斉編、[新
通史]日本の科学技術第4巻 所収)、2011年、
pp. 291-310.

林真理、「飯島魁」「志賀潔」「秦佐八郎」「稲
田龍吉」「鈴木梅太郎」「石原忍」、村上陽一
郎編、日本の科学者101、新書館 所収、
2010年

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林真理 (HAYASHI MAKOTO)

研究者番号：70293082

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし